



文学のポップカル チャー化的について



小野ユージン

純文学について

純文学の定義は十人十色であり、誰もが納得できる明確な定義はないといわれている。特に、昭和50年代以後、文学のポップカルチャー化ともいえる現象が進行してからは、一層定義が困難になっただろう。

だが、純文学が芸術とみなされていた昭和40年代頃までに限って言えば、純文学という言葉についてある程度の共通イメージがあっただろう。

純文学とは、小説、文学作品のうち、芸術的価値が高いとみなされたものに対しての、一種の尊称、敬称であっただろう。

そして、昭和40年代までの日本の「文学・小説の世界」は、純文学を頂点にして、純文学でない文学・小説—中間小説—大衆小説—ミステリー・SFといった階層構造（ヒエラルキー）をなしていたといえる。

では、どういった作品が芸術的価値が高いとみなされていたかといえば、大部分の作品はリアリズムの手法で人間を描いたもの、人間の内面や心理を描いたものであったため、純文学とはリアリズムの手法で人間を描いた小説だ、といったイメージが社会に流通していったといえる。純文学＝私小説といったイメージをもつ人が多くいたのも、私小説がリアリズムの手法で人間を描く小説の典型だったからだろう。

だが、純文学＝リアリズム小説といった定義が的外れなのは、安部公房が純文学作家と呼ばれていたことからあきらかだろう。

ただ、非リアリズム系の作家で純文学作家と呼ばれた人は極少数であったため、世間一般では「純文学＝私小説、あるいはリアリズムの手法で人間を描いた小説だ」といったイメージが根強く浸透していたといえる。

文学のポップカルチャー化

だが、純文学が尊称、敬称であった時代は昭和40年代頃までで終わったといえる。昭和50年代にはいると、芸術とみなされる作品が減少し、ポップカルチャーといえる作品が文学、小説の主流となっていった。

「芸術としての文学」から「ポップカルチャーとしての文学」への転換を象徴するのが、1975年、76年の芥川賞だろう。

1975年（昭和50年）下期の受賞作家・中上健次は、文学が芸術とみなされていた時代の最後の大物といった雰囲気がある。

一方、1976年（昭和51年）上期の受賞作家・村上龍は、ポップカルチャー化した文学を代表する作家といえる。

ただし、ポップカルチャー的な文学は村上龍以前にも多く書かれていたはずだし、文学の芸術からポップカルチャーへの変質は、石原慎太郎の「太陽の季節」から村上龍の「限りなく透明に近いブルー」まで、長い時間をかけて徐々に進行していった現象といえるだろう（ポップカルチャー的な文学の起源はもっと古くに求められるだろうけれど）。

文学の主流が芸術からポップカルチャーへと移行した現象は、音楽の主流がクラシック音楽からポピュラーミュージックへと移行した状況と似ているかもしれない。

ただ、音楽の場合は使用する楽器、編曲の様式など、少し聴いただけでクラシック音楽とポピュラーミュージックのちがいがわかる。

また、両者がことなるジャンルとして区分けされている。

だが、「芸術としての文学」と「ポップカルチャーとしての文学」は、何頁か読んだだけでちがいがわかるわけでもないし、両者をわける明確な基準もない。

作家や批評家の中には、通俗的な作品は文学（芸術）ではなく読み物だと主張する人もいるが、通俗的かどうかを決めるのは読んだ人の主観的な判断にすぎず、明確な基準がないことにはかわりがない。

それに、「芸術としての文学」と「ポップカルチャーとしての文学」という区分けはただの言葉遊びにすぎず、そもそもある作品を「芸術」であるか「ポップカルチャー」であるかにわける行為自体に意味がないともいえる。

ただ、昭和40年代までの文学作品と、昭和50年代以降の文学作品に質的なちがいを感ずる人は多くいるだろう。

そして、そのちがいは、文章表現力、技術力（ストーリーテリングの技術ではなく、あくまでも文章表現の技術力）のちがいだろう。

クラシック音楽の演奏家が、修練によって身に付けた高度な演奏力、技術力をもっているように、文学が芸術とみなされていた時代の純文学作家は、文章修業によって得た芸術的とみなされた文章表現力をもっていたのだろう。

文学のポップカルチャー化とは、修業によって身に付けた高度な文章表現力がなくても、内容が面白ければ評価される時代へと変化したことをいうのだろう。

(今述べたことは、1980年代、「文体信仰の終焉」といった言葉で語られていた筈である。)

1980年代以降の文学作品、小説の評価は、文学が芸術とみなされていた時代の評価基準を用いるのか、ポップカルチャー化した時代の評価基準を用いるのかによって大きくことなるだろう。

前者の場合、1980年代以降の作品は大半が評価できないものであろう。

一方、後者の立場の人からすれば、文学が芸術とみなされていた時代の評価基準を用いるのはアナクロニズムにすぎないのかもしれない。

階層構造の崩壊

昭和50年代以降、文学のポップカルチャー化とともに、純文学を頂点とした階層構造も崩壊し、純文学のイメージも変質したといえる。

こうした階層構造の崩壊は、市民革命によって身分制社会が崩壊し、国民が法的、形式的に平等になった社会を連想させる。

純文学、中間小説（1980年代には既に死語にちかくなっていたが）、大衆小説あるいはエンターテイメント等、各ジャンルがかつてのような上下、高低の関係ではなく、横の関係（ただのサブジャンルのちがい）になったといえる。

1983年頃、岩波書店の雑誌「ヘルメス」で、大江健三郎、井上ひさし、筒井康隆の3人が当時を代表する作家として鼎談を行ったが、貴族（純文学）、中間階級（中間小説、大衆小説）、下層階級（SF）と、出自のちがう作家たちが対等な関係として出版社に遇されていたところに、身分制の崩壊が感じられた。

ただし、こうした上下関係の消滅は表面上なくなったようにみえただけかもしれない。表層的な身分関係がなくなった分、ジャンルごとの優越感、劣等感はより隠微な形で温存されていたかもしれない。

純文学概念の変質

文学のポップカルチャー化、それにともなう階層構造の崩壊、これらによって純文学の尊称、敬称としての意味は、実質的に消滅したといえる。

大江健三郎や中上健次など少数の作家は、尊称の意味で純文学作家と呼ばれていたが、「純文学」自体が他のジャンルより価値が上だという認識はなされなくなっていった。

純文学という言葉に共通認識（文学、小説のうち芸術的価値が高いもの）がなくなったにもかかわらず、純文学という言葉の定義を明確にせず、各人がそれぞれの定義で純文学という言葉を使用したため、この時期以降の純文学という言葉の意味は混迷をきわめる。例えば1980年代には、かつて中間小説作家、大衆小説作家とみなされていた小林信彦、筒井康隆の作品が、純文学書き下ろし作品として出版された。

誰もが好き勝手な定義で自分を、自分の作品を純文学作家、純文学作品と名乗ることが可能になったといえる（私などは、非純文学系作家たちの純文学コンプレックスの根強さをあらためて痛感させられた。ただし、純文学書き下ろし作品という肩書が、作家の意向ではなく出版社の意向でつけられたのなら、私の感想は的外れといえるかもしれない）。

昭和50年代以降デビューした純文学作家は、純文学系の雑誌からデビューしたから、あるいは出版社が純文学作家としてデビューさせたから純文学作家と呼ばれるという一種トートロジ的な状況も生じた。

また、純文学という言葉に尊称としての意味がなくなった分、私小説作家やリアリズム系の作家は、作品の価値にかかわらず、私小説作家であるというだけで、リアリズム派であるというだけで純文学作家と呼ばれるようになった。

そして、純文学概念の変容で純文学作家に一番大きなダメージをもたらしたものは、エンターテインメントとしての面白くない小説が純文学だ、という否定的な定義だろう。純文学というジャンル自体に特別な価値があるわけでもない、エンターテインメントとしての面白さもないという状況は、純文学作家の自尊心や存在意義に大きなマイナスの影響をもたらしただろう。

これは、作家が自らの作品をエンターテインメントとして書いているか、エンターテインメントではないものとして書いているかといった、書き手の意識の問題でもある。

かつては、純文学より価値が劣るものがエンターテインメント、と純文学側に軸をおいて小説がジャンルわけされたが、1980年代にはエンターテインメントではないものが純文学、とエンターテインメント側に軸をおいて小説がジャンルわけされるようになったといえる。

今日の純文学概念

現在でも多くの方は、（おそらくは無意識のうちに）純文学という言葉をつかっている。ただ、純文学、文学、非文学系の小説（エンターテインメントなど）という概念を、明確に定義して使用しているのかは疑問である。

まず、純文学を文学の同義語として使っている人がいる。この場合、小説には、「文学＝純文学」と文学以外的小説（エンターテインメントなど）と2種類のものがあると定義しているのだろう。

ただ、なぜ文学と言わず純文学という言葉を使うのかという疑問がのこる。使い慣れているから癖として使っている場合と、＜文学＞を純文学と文学以外的小説（エンターテインメントなど）を合わせた広義のものと定義している場合がある。

次に、文学には純文学と純文学以外の文学があると定義している人（純文学を、文学作品のうち芸術的価値の高いものと定義している人）がいる。

この場合、純文学以外の文学と文学以外的小説（エンターテインメントなど）の違いをどう定義付けているのかが疑問となる。

純文学という言葉を使う人は、文学、純文学、小説、エンターテインメントという言葉はどう定義付けし、どう区別しているのかを明確にしてから使うべきだろう。

なお、私は純文学という言葉に死語にすべきという意見をもっている。

純文学という言葉の定義に一定の共通理解がない状態で、各人がかつてな定義でこの言葉を使っても混乱するだけだろう。

もし使うのであれば、文学作品の中でも芸術的価値が高いものという、昭和40年代までの定義に基づいて使用するべきだろう。

もし、現在でも純文学という言葉を使いたいのなら、以下の3つの点を明確にした上で使ってもらいたいと思う。

1・文学と純文学の定義

文学と純文学という言葉と同じ意味で使っているのか。2つの言葉にちがいがあんなら、そのちがいはなにか。

2・文学と小説の定義

文学と小説と同じ意味で使っているのか。

小説のなかに、文学と呼ばれる作品と呼ばれない作品があるのか。例えば、かつて中間小説、大衆小説と呼ばれていた作品は文学ではないのか。これらの作品も文学と呼ぶのか。

3・文学とエンターテインメントの定義（境界線）

ミステリーやSFなどのエンターテイメント系の作品は文学とは呼ばないのか。

文学のポップカルチャー化について

<http://p.booklog.jp/book/7690>

著者：小野ユージン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onoeugene/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7690>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ